

氏 名 大場 千景

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1466 号

学位授与の日付 平成 24 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 無文字社会における歴史記憶の生成と継承—南エチオピア
牧畜民ボラナにおける口承史の分析をととして—

論文審査委員 主 査 教授 小長谷 有紀
教授 竹沢 尚一郎
教授 韓 敏
教授 坂井 信三 南山大学
教授 宮脇 幸生 大阪府立大学

論文内容の要旨

本論文は、エチオピア南部に居住するオロモ系牧畜民ボラナのもつ歴史記憶の構築・共有・継承に関する歴史人類学的研究である。

ボラナは、ガダとよばれる世代階梯制度によって緻密に統合された社会を形成しており、多くの研究者によってガダに関する社会人類学的研究がなされてきた。ボラナの口承史は、このガダと密接に結びつきながら生成されており、ガダが生み出す時間に基づいて出来事が編年化されながら語られたものである。本研究の目的は、ボラナの人々の口承史に関する語りの分析を通して、人々が生起してきた無数の出来事をいかにして「ボラナの歴史(*seena-a-Boorana*)」として構築し、文書記録を持つことなしにそれらの膨大な歴史記憶を一致させ、継承しているのか、その文化的な技法を解明することである。

本論文は、8章からなり、以下にその概要を述べる。

第1章では、サハラ以南アフリカの無文字社会における口頭伝承に基づく歴史研究および、北東アフリカにおけるオロモ社会における歴史研究の流れのなかに本研究を位置づけた。第2章では、本論文の調査対象である、ボラナと呼ばれる人々の生業、社会、宗教について概説している。第3章では、口承史の語り手、聴衆、語りの場、およびボラナ社会における機能について記述した。第4章では、広域で居住する14人の語り手から収集した口承史に関する語りを比較しながら、語り手間で共通に見られる語りのカテゴリーとパターンを統計的に整理した。5章から7章は、4章で整理したパターンについてさらに考察したものとなっており、それぞれ、歴史語りの中で頻繁に言及される予言者、詩、災因概念が歴史記憶の中でどのような役割を果たしてきたのかについて考察した。第8章では、文化的な言説や構造を内在させ高度な一致性を保ちながら継承されてきたボラナの歴史記憶の存在意味を社会構造との関係から考察した。

本論文で得られた理解は、以下の7点にまとめられる。

- 1) 14人の口承史の語りのあり方を比較すると、語りの78%が近隣の民族との紛争、政治的対立および内紛、人物談、天災に関するもので占められていた。また、語りの80%において、5つの語りのパターンが用いられており、それぞれ①出来事を飼いならずパターン、②出来事をテキスト化するパターン、③出来事を想起するパターン、④出来事を政治に巻き込むパターン、⑤出来事を転用するパターン、と命名することができる。
- 2) 予言者が登場する語りに共通していえることは、予言者が人々に予言したり、呪術を施したりしていた背景にはすべて社会を震撼させたカタストロフィックな出来事があったという点と、カタストロフィーは、予言や呪術によって超克されていくという筋書きであった。この予言や呪術によるカタストロフィーの超克は、出来事の偶然性を必然性へと転換し、カタストロフィーを理念的に飼いならしながら、「歴史」を構築する技法の1つと考えられる。
- 3) 語りにおける詩の発話は、出来事をテキスト化し、歴史記憶を一致させ、維持する無文字社会の技法であることが明らかになった。一方で、詩と史の交錯は、語り手によ

る詩の注釈の違いによって違った歴史が創出されてしまう可能性を常にはらんでおり、難解な詩の解釈が過去への新たなディスクリールを生成してしまう場合もある。この 2 つの側面が詩の歴史記憶における機能といえる。

4) ボラナは、出来事のある一定の周期によって回帰すると考えており、出来事の周期説を分析していくと、ボラナの歴史記憶を支配し、構造化する歴史法則が見えてきた。ボラナはこの歴史法則を前提とした永劫回帰的な史観をもっている。この史観によって、①生起した出来事のうちの出来事を記憶するのかが決められてしまうこと、従って回帰史観は、歴史記憶を一致、維持させるが、同時に②回帰史観に支配されるがゆえに、歴史記憶が新たに創出され、複数の「歴史」を生み出してしまうこと、さらに、③過去や現在にとどまらず未来までもが回帰史観に巻き込まれることが明らかになった。

5) 永劫回帰史観は、循環型の時間概念を内在させている。ボラナは時間の流れに周期的な歴史法則を演繹的に内包することで、時間を構造化するとともに、過去・現在・未来に至る「ボラナの歴史」に構造的連続性を付与する。この時間概念がボラナの歴史記憶の構造そのものを映し出している。

6) ボラナの歴史記憶は、政治システムである世代階梯制度の中核において、政治的に重要な役職を歴任してきたリネージュによって保持されてきた。彼らは、世代階梯にまつわる歴史や慣習に関する知識を独占することによって、自分たちの政治的立場を保持してきた。自分たちのリネージュの「歴史」に関して保身的語りをする一方で、政治的敵対リネージュの失態に関する「歴史」を暴露するという語りをめぐる政治的駆け引きの中で、歴史記憶は取捨選択され、構築され、維持されてきた。

7) 一方でそうした政治的社会的背景のみでは説明できない、社会の連続性や必然性を正当化し、維持するための様々な文化的言説が存在する。これらの言説が想起させることは、人間の「物語」への希求であり、文化的な言説を生み出すことで、自分たちの周りで生起する出来事を物語り、いかなる破局的な出来事が起ころうとも崩壊しない安定した世界観を創出し、自分たちの実存を確保してきた。

以上の結論から、上述の本研究の目的に対して次のような貢献を引き出すことができる。これまで、口頭伝承は、過去と現在の対話によって再解釈されながら継承されてきたといわれてきた。本研究で明らかになったことは、口頭伝承には現在へのまなざしをも支配しながら、伝承を保つ不変の技法を内包していることである。また、口頭伝承は、過去に生起した出来事を現在に伝えるものであるともされてきた。だが、口頭伝承に内蔵する出来事を記憶する技法は、一方で出来事の存在自体を創出するようにも働く。本研究では、これまで看過されてきた、口頭伝承に内在する出来事を記憶する側面と出来事を創出する側面が実は表裏一体の関係にあったことが明らかになった。反復と創造というこの 2 つの相反する側面は、伝承が内包してきた構造が生み出すいわば作用と反作用の関係にあり、それらが相互に関連しながら、長い年月をかけて構築され、洗練されてきた世界に対する構造化された認識が、近代をも巻きこみながら、現代に生きるボラナの人々の歴史記憶を支配しているということを明らかにできたことが本論文の最終的結論である。

本論文は、エチオピア南部のオロモ系牧畜民ボラナが、文字をもたず、かつ特定の職業的な語り部に依存しないにもかかわらず、統一性をもって口承史を維持し、集団の歴史として成立させているメカニズムをあきらかにした人類学的論考である。著者は、エチオピア南部のサバンナ地帯に居住するボラナ社会において、のべ 32 ヶ月におよぶ現地調査を実施して口承史を収録し、ローマ字によるボラナ語の文字化と邦訳とおこなうとともに、それらの膨大なテキストを分析して、ボラナが語りをとおして歴史記憶 (historical memory、歴史に関する記憶) を生成、継承する方法について解明した。

論文は 8 章からなる。第 1 章では、サハラ以南アフリカの無文字社会における口頭伝承にもとづく歴史研究、および北東アフリカ、ボラナをふくむオロモ諸社会における歴史研究を整理しながら、研究の視座を提示している。口承史に関する従来の研究は 2 つにまとめられる。1 つは、口承史に語られる出来事を史料と照合して出来事の通時的継起としての歴史をより正確に再構成しようとする研究である。もう 1 つは、口承史に内在する論理を探る研究であり、著者は本論文では後者を採用する。

第 2 章では、ボラナ社会を概観したうえで、独特の社会制度をくわしく紹介し、口承史との関係をあきらかにしている。ボラナ社会には「ガダ」(広義のガダ) とよばれる世代階梯制が 17 のクランを横断して編成されている。すべての男子は原則としてこの制度に組みこまれ、ほぼ 8 年ごとに上位の階梯へ昇格する。上から 3 番目の、壮年期に相当する階梯「ガダ」(狭義のガダ) から、「ガダの父」とよばれる役職者が選任され、政治的リーダーとなる。「ガダの父」の系譜は約 500 年にわたって記憶されており、各「ガダの父」が「ガダ」階梯に属する 8 年間の出来事が伝承される。このように、世代階梯制と密接に結びついた口頭年代史 (oral chronicle) としてボラナの口承史はなりたっている、という。

第 3 章では、ボラナ社会における口頭伝承一般のなかに口承史を位置づけ、誰が誰にどのように語るかという語りの場を分析する。その結果、「アルガ・ダゲーディ (見たこと・聞いたこと)」とよばれる知識が政治に参与する資格要件となっていたが、1990 年代の人類学者の介入、教育の普及、テープレコーダーの流入により、語りの場が変化し、現在のような口頭年代史として収録可能になったと考察している。

第 4 章から第 7 章までが、語りの内容について分析した部分である。第 4 章では、14 人の語り手から収集した語りを比較しながら、語り手間に共通してみとめられる語りの特徴を統計的に整理している。つづく第 5 章から第 7 章は、第 4 章で整理した語りのパターンについてさらに考察してゆく。

第 5 章では、口承史において頻繁に言及される、「ラーガ」とよばれる予言者の存在に焦点をあてる。「ラーガ物語り」(予言者に関する語り) が、偶然の出来事を必然として読みかえるメカニズムであり、とりわけカタストロフィックな出来事を受容をうながしていることがあきらかとなる。著者はこれを「予言・呪術成就史観」と名づける。第 6 章では、口承史のなかの英雄に関する語りで頻繁に発話される詩に着目する。韻律化され、定型化されたフレーズの利用は、記憶作業を容易にすると同時に、詩と史が交錯することによって、語り手による新たな歴史記憶の創出につながると指摘する。第 7 章では、出来事の原因を説明するためにもちいられている災因論に注目する。口承史の主役である「ガダの父」

たちにはそれぞれ、7つの「マカバーサ（運命）」（内紛、旱魃、紛争、平和など）の1つが規則的に循環して付与されており、出来事の生起を循環的に説明するメカニズムが用意されていることがあきらかとなる。著者はこれを「マカバーサ・サイクル史観」と名づける。また著者は、この史観にしたがって出来事の生起が解釈されるだけでなく、歴史記憶の定型化が容易になること、その一方で史観に支配されるがゆえに新たな歴史記憶が創出されてしまうという2つの側面があることをあきらかにしている。

第8章では、上述のような文化的な概念や構造を内在させることによって一致性を保ちながらも、むしろ話者による語りの内容差に注目する。そして、複数の正統な歴史の共存は、ボラナ社会がつねに内部で拮抗し、分裂しつつも統合されるという離散性と凝集性を兼ねそなえた社会構造を反映しているのではないかと推測し、今後の課題として社会の凝集性と口承史の呼応を考察したいとしめくくる。

著者の、口承史に内在する論理を探る手続きは厳密であり、その分析は周到である。ボラナ社会において、歴史に関する記憶の共有システムが存在し、それが社会構造の維持に寄与しているという結論も説得的である。ただし、ボラナ社会にみられたような口承史の特徴を社会の凝集性にのみ還元してしまう必要はないだろう。本論文はなによりも、比類なき一次資料を合わせもち、今後さらにさまざまな分析の可能性を有しているからである。広域的なボラナ社会の各地に居住する26名の語り手から採録されたボラナ語のテキストは、「ガダの父」70代分、約500年、およそ10万語（200頁）におよぶ。アフリカの一社会の口承史がこれほど綿密に記録されたことは世界でも稀であり、本研究はアフリカ口承史研究の領域で決定的な貢献をなすものとして、国際的に高い評価を受けるであろう。

また、本論文により、無文字社会に生きる人びとの歴史への内在的な視点があきらかにされたことは、文字をもちいた歴史記述との差異や類似など、将来の比較研究のための基礎作業としても大きな価値をもつものである。

以上のことから、本論文が博士の学位にふさわしいきわめて優れた論文であると認定し、全員一致で、博士の学位を授与するに値すると判断した。